

へ下向す。大野修理・木村長門・渡邊内藏助、駿府にての事を聞き、時々談合して片桐を成敗せんと企つ。爰に今木源右衛門と云ふ者、市正の寄子なるが、此の企を聞き、潜に市正に聞す云々。今木源右衛門は後淺井源右衛門と云ふ。此の跡二代を源右衛門政右と云ひ、連歌の上手也。と見ゆ、有澤永貞の古兵談殘襲集に、今木源右衛門は大坂夏陣五月七日に、秀頼公最期の前、渡邊内藏助が妻を害し、秀頼公へも自害を進め、其身は脇刺を腹へあつるを、何れも留むるゆゑ力なく止め、さて秀頼公の使を勤むるに、再び城へ入る事叶はず。落城の後利常卿召出され、此時淺井と改姓して、陽廣公幼年の時より傳と成る。公薨逝の時、殉死せん事を願へり。利常卿聞召され、彼は今木源右衛門と云ひし時、大坂にて腹を切り損せしものぞ。此度切らせしと宜ふとぞ。又古兵談に云ふ。淺井源右衛門常々子供に教へけるは、袴の紐の結びやうの危相なるはあし。氣を付けて念に入れて結び、餘りはしかと挟みたるよしといひけるとなり。然るに源右衛門、陽廣公の追腹をせし時、袴二つ着けるが、上を脱ぎ、下に着したる白き袴に袴を着て、袴

の紐をしかとしめ、兩わなに結び、とくと引合せ兩方を挟みて、扱押はだぬぎ切腹仕たりと也。常に子共に教へしと符合すといひ傳ふ。とあり。三靈記に、淺井源右衛門は御幼少より御守として三輪主水に替り、晝夜御前に仕へ奉り、其なじみ深くして、あるにあらぬ慕執の涙とせめかねて追腹せられ、高野山への御供も齒骨と成りて致さる。一騎當千とは是なりと諸人申しあへり。小笹善四郎は、誰か御供あるならば、二番は拙子也といへる處、淺井源右衛門御供と聞かば、追付是も追腹す。とありて、正保二年四月の事也と云ふ。菅家見聞集に、源右衛門は淺井備後守の後也とあり。實にさる事にや。また可觀小説に云ふ。陽廣公御著述の品は、一本種、自論記、百首御歌等あり。自論記は、菊池十六郎秋涯の實父淺井源右衛門一政、學問を好み申儀御存知被遊、御自作の物拜見被仰付。自論記其一なり。一政初は御近習相勤むる處、病身に成り御斷申上げ引籠籠在りしかど、不絶御懇に被遊、右御自作の書共拜見仰付けられしと也。毎度夜分深更に及び手水し、袴着し拜見せし事、秋涯十歳内外の頃にて、慥に覚え申すと也。一本

種は、井上三太夫祖父六左衛門、御小將にて御納戸役相勤め、覺え罷在り。大猷公理學御好被遊、陽廣公御學問被爲好事被聞召、何ぞ御作り被上候様にと御所望にて、一本種御撰被上之旨、六左衛門暨佐々木道休・板津檢校など傳話せし由秋涯話也。とあり。按ずるに、鳩巢文集に、陽廣公遺訓序。爲賀人某作。と記載し、序中に、臣祖某。辱列侍從。與聞其事云々。延寶五年十二月日臣某謹識。とあり。富田景周の遺訓校正本に、右の序を載せて、左註に、臣某者。姓名並闕。則以今不可追考。若是淺井一政歟。といへり。右は臣祖某と序中にいへるをば一政とするか。若し然らば、一政が孫淺井鹿助愛政が代序なるべし。

○淺井源右衛門政右傳話

政右は一政の男にて、歌學連歌に長じ、當時吾が舊藩中にて風雅に長ぜし一畸人なり。混見摘寫に云ふ。淺井源右衛門政右百首和歌を讀みて、阿野大納言季信卿へ点を請けたりけり。其の歌中に。

梅の花それとは見えぬ明ぼのは

たゞ月雪の匂ひなりけり

此の歌或人云ふ。なりけりは讀まぬ事のやうに被制けるに、如何と阿野殿へ奉問ければ、大方は讀みおほせぬ故に制の詞とす。此の歌などのやうに、能くなりけりと讀みおほせられたれば何か可苦と仰せられけり。其の序とやらんに、同じ頃加州より添削を望みて一卷到來す。是は政右が一卷とは大に劣りたり。殊に歌を讀みて後に題を附けたる歌多し。地下の歌に必ず有事也と宣ひけるとなん。葛卷昌興自記に云ふ。元祿二年正月十六日。往昔宗長所持之文藁。横山左衛門忠次爲家藏。先年淺井源右衛門政右摸之。以爲家珍。時詠歌。其辭云。

いや高き峰の柴屋の月影を

苔の雫にうつしてぞ見る

此事去年山本孫八郎惟明依語聞之。仍舊臘附佐々喜藤次正業。許借之事政右申達處。則可慰借之由也。就之今日送書於正業。件之文藁可借請之旨申達之。廿二日御所令懇望柴屋文藁。政右許借。今朝從正業傳達之也。幅一尺一寸八分許。長一尺九寸八分許。高三寸許。厚三分許。筆返三分許。以檢造之。件之文藁桐之處、政右檜に而摸之由